

## K2 西壁から RNA 研究を考える

ヒマラヤの高峰で「魔の山」として恐れられたアンナプルナに初登頂した登山家モーリス・エルゾーグは、「人間はそもそも難しいことが好きなのではないだろうか」という言葉を残した。我々研究者は、ある意味でその最たる人々だと思う。研究は難しいから面白い。うまくいく方法がわからないからこそ面白いのだ。なるべく先人の足跡がない領域を自ら切り開くのがよい。そして、そこに多くの追随者が集ってきたことを認識して初めて、自身の研究の価値を知る。こうした構図は、研究者にとっての理想ではないだろうか。しかし現実には、それを実感することは並大抵のことではない。先人の足跡がない領域を切り開くという行為は、先の見えぬ雪中ラッセルを思い起こさせる。しかも、その進んでいる方向が正しいとは限らない。だからこそ、五里霧中の状況から到達点を見いだすことができたとすれば、それはきわめて価値ある成果である。しかし多くの場合、なぜそれを見いだせたのかを事後的に説明することは困難だ。「運が良かった」という言葉をしばしば耳にするが、これはまさしく、先人となりえた者の率直な実感なのだろう。もっとも、この「運」は宝くじのような偶然ではない。「幸運はそれを準備した人のもとに舞い降りる」という言葉があるように、それを引き寄せる側の問題なのかもしれない。

困難への渴望を最も強く心に宿した人々として、雪中ラッセルをものともしない先鋭的な登山家の姿が思い浮かぶ。彼らは、これまで誰も成し遂げたことのない困難の征服に人生をかけてきた。かつて、より高いサミットをめざすこと自体が価値であった時代は、14 座ある 8,000 メートル峰の頂がすべて登られることで終わりを告げた。やがて登山は、さらなる困難という付加価値を求める時代へと移行する。単独で登る、ボンベを用いない無酸素登攀で、しかも厳冬期に、といった具合である。8,000 メートルでは酸素濃度は平地の 1/3 にまで低下する。意識が朦朧とするそのような極限状態のもと、崩落の危険と隣り合わせの岩と氷の壁をひたすら登り続け、頂を目指す。厳冬期には、マイナス 40 度の烈風の中でそれを行うのだ。それでも驚くべきことに、そうした条件を克服する超人的な先駆者は必ず現れる。すると人々は、さらに困難な条件を求めて次の挑戦を始める。現在は、バリエーションルート開拓の時代である。いかに人の踏み跡のない難解なルートから登るか、そこに新たな困難が設定される。

そうした中で今年の夏、世界の難攻不落のバリエーションルートの象徴とも言える K2 西壁に、二人の日本人が挑んだ。K2 (8,611m) は、パキスタンのカラコルム山脈最奥部、バルトロ氷河の上部に聳える世界第 2 位の高峰である。その圧倒的なピラミダルな山容は神々しく、一方で登頂困難な“キラマウンテン”としても名高い。この西壁ルートに挑んだ平出和也と中島健郎は、数多くのヒマラヤにおけるバリエーションルート開拓を成功させ、世界の先鋭的登山家に贈られる賞を幾度も受賞してきた実力者であった。

2024年7月27日、ルート偵察中だった二人は7,500メートル付近から滑落し、帰らぬ人となった。あまりに急峻な地形のため、救助隊は近づくことさえできなかった。原因は定かではないが、上部セラックからの落水に巻き込まれた可能性が指摘されている。

生前、二人の足跡はドキュメンタリーとして幾度となく放映され、その中で彼らはK2西壁への思いを語っていた。彼らは決して無防備にそこへ向かったわけではない。長年にわたり誰も成し得なかった西壁を徹底的に研究し、登攀ラインを見据え、超難度のヒマラヤ登攀で準備を重ね、集大成としてK2に挑んだのである。先鋭的な登山家の登攀記録を読むと、周到な準備と、時に臆病とも思える慎重さの一方で、勝敗を決する大きな賭けに出る瞬間が描かれている。賭けに乗らないことは敗北を意味する。しかし登山においては、その敗北、すなわち生きて帰還することもまた、勇気ある選択として評価される。それほど研ぎ澄まされた判断が要求される世界なのだ。それでも時として登山家は賭けに乗り、勝利を掴む。この二人も幾度となくそうした賭けに勝ち抜いてきたに違いなかった。

これほど壮烈ではないにせよ、研究者が人生を賭けて困難な課題に立ち向かうとき、一か八かの判断を迫られる瞬間があるのではないだろうか。それが結果的に大きな発見へとつながる転機となる瞬間である。こうした瞬間こそ研究という行為のハイライトなのかもしれないが、当人がその重要性をその場で認識することはほとんどない。多くの

場合、それは日常的な試行錯誤の一つとして記憶に埋もれてしまう。事後的にその瞬間を思い返し、「なぜあの時そこに着目したのか」と自問しても、結局は説明不能な引力があったとしか言い表せないだろう。合理性だけでは語れない衝動が、図らずも人を正しいルートへと導き、それが誰も到達しなかった困難を打ち破ることもある。

研究者は賭けに敗れても命を落とすことはない。何事もなかったかのように日常は続く。したがって、K2 西壁への挑戦と RNA 研究を同列に論じるつもりはない。ただ、誰も通っていない道を初めて切り開こうとする人間の心持ち、その先に何かあるのかわからぬまま一步を踏み出す姿勢には、分野を超えて通底するものがあるように思える。研究とは、安全な稜線歩きではなく、ときに引き返す理由を自ら断ちながら進む行為である。RNA の世界には、いまだ人の足跡がつかない未到峰が数多く残されている。我が国の、とりわけ若い RNA 研究者たちが、その開拓に向けて、巷に溢れる高度な解析技術の習得にとどまらず、決定的な賭けを逃さない勇敢さと、自己犠牲を厭わぬ覚悟をもって研究を切り拓いてくれる将来に期待したい。

(2026.3 日本 RNA 学会会報 No.52・巻頭言より)